

インド哲学仏教学

◇教員◇

教授：下田正弘、丸井浩、蓑輪顕量

准教授：高橋晃一

助教：青野道彦

◇学生◇

学部：9名、修士課程：8名、博士課程：16名

インドの思想文化は、3000年にわたる長い歴史を通じて、その豊かさと奥深さをもって、アジアはもちろん、西欧の人々をも魅了しつづけてきた。インドは7回生まれ変わっても学びきれないと言われるほど豊かな内容をもつ『ヴェーダ』をはじめ、多様な哲学的・宗教的な文化・文献を蓄積してきている。また、インドからアジア各地に広まった仏教は、東南アジアや東アジア、またチベットにおいて、今日でもなお力強い生命を保ち、多くの人々の生きる指針となっている。永遠に新しく、汲めど尽くせぬこの豊かな思想文化の伝統の一端にでも触れることは、我々に大きな勇気と慰めを与えてくれる。

インド哲学仏教学専修課程（略称：印哲）は、このようなインドの思想文化、およびインドに起源をもち、アジアの諸地域に展開した仏教の思想文化の研究と教育を目的とする。その研究対象は、インドの古代から近代の思想文化にまで及び、また、仏教に関しては、インドはもちろん、他のアジア諸地域（東南アジア・東アジア・チベット）にまでわたる。このようにきわめて広い研究領域をもつことは、本専修課程の特徴であり、大きな魅力の一つであろう。

このようにインド思想ならびに仏教は長い歴史を持ち、広大な諸地域へと多様な展開をとげてきたので、その研究方法は多様であり、歴史学・考古学・人類学あるいは比較思想などからのさまざまな切り込みも可能である。しかし、その基礎となるのは文献の研究である。長大な歴史を通じて人びとはつねに伝承された文献にみずからを照らし、その理解をふたたび

文献へと映し出していったからである。本専修課程では、この思想の過程が深く刻まれた原典の解明に重点を置き、その基礎力の養成を大きな目標とする。一見、迂遠とも思われる道筋ではあるが、長い目で見れば地道な文献解説こそが、その後のさまざまな研究を切り開く最も確実なアプローチだからである。

高い山を踏破するには周到な準備が必要なように、奥行き深い原典を読みこなすためには一定の語学の力が必要となる。インドにはきわめて多数の言語があるが、主要な哲学文献はサンスクリット語で書かれている。したがって、本専修課程ではサンスクリット語の基礎力の養成に力を入れている。重要な基礎さえしっかりできれば、そこから無限に世界が広がってゆく。たとえ中国や日本の仏教を専攻しようという人でも、仏教がインドから伝わったものである以上、まずサンスクリット語を学んでその原点を把握することが求められる。仏教の重要な諸概念は、サンスクリットという言語を通してかたちづくられ発展してきたからである。

本専修課程に進学を希望する学生は、教養課程で哲学的なものの考え方に習熟するとともに、あわせて諸外国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語など）に積極的に挑んできてほしい。また、サンスクリット語文法は本郷でも開講されているが、駒場で学んでいれば、それだけ早く原典に向きあい、深い世界を味わうことができるようになる。

本専修課程は、明治 43 年（1910）に遡る長い歴史をもっている。しかし、単に古い伝統を誇るだけでなく、常に新しい問題意識をもって日本の、ひいては世界の学界・思想界に大きな貢献をなしてきた。専修課程の名称として、長い間、創設以来の「印度哲学」を用いてきたが、平成 6 年（1994）より「インド哲学仏教学」に改められた。それによって本専修課程の内容はより明瞭になったと思われる。

ここで、本専修課程の専任教員とその専門及び講義の内容を紹介しよう。

丸井教授はインド哲学（仏教以外）を担当する。その主たる研究領域はインド哲学の一派ニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派の思想であり、インド思想における宗教と哲学の関係を追跡しているが、2016 年度の前期（春学期）にはサンスクリット文献からの撰文集（丸井作成）を読み、後期（秋学期）は『ニヤーヤ・パーシュヤ』第 3 章第 2 日課の中の因果応報思想に関連する箇所の前半までを読み終えた。

下田教授はインド仏教（初期・経典・律）を担当する。その主たる研究領域はインドの大乗経典で、特に初期仏教から大乘仏教成立にいたる思想史・社会背景史の解明を進めている。主著『涅槃経の研究』のほか『新アジア仏教史』全15巻、『シリーズ大乘仏教』全10巻等の編著がある。2016年度は演習と仏教概論を担当した。演習は、パーリ語またはサンスクリット語の仏教経典の解読を進めているが、2016年度はパーリ語の基礎文法を終えたのち初期経典を取り上げ、読み進めた。仏教概論ではインド仏教を中心に思想の特徴を概観した。このほかに次世代人文学開発センター創成部門において「人文情報学概論Ⅰ・Ⅱ」を講じている。

藁輪教授は東アジアの仏教、主に日本仏教を担当する。その主たる領域は、中世の時代にあり、寺僧と遁世門という二つに区分される僧侶の日常の営みに配慮しながら、彼らの残した資料から思想的な解明を進めている。昨今では、心を見つめる止観の伝統にも関心を持って研究を進めている。2016年度は、駒場において、心を見つめる伝統の観点から一般の学生に向けた総合講義（「心と体と思想」）を担当し、本郷においては法然の『選択本願念仏集』、貞慶の『興福寺奏状』の輪読を進めた。寺院に残る写本資料などが扱えるようになるとともに、思想的な展開が理解できるようになることを目指している。また、2017年度も比較文化的な視点からも仏教を捉えられる比較仏教論にも取り組むでいる。

高橋准教授はインド仏教（論書）を担当する。その主たる研究領域は大乗仏教の瑜伽行派の思想で、特に唯識思想の成立過程の解明を進めている。主著『『菩薩地』「真実義品」から「撰決択分中菩薩地」への思想展開』のほか、『唯識と瑜伽行（シリーズ大乘仏教7）』では「初期瑜伽行派」の章を担当している。2017年度、演習では瑜伽行派の初期の文献である『唯識二十論』、七世紀ごろのインド仏教の認識論を扱った『正理一滴論』の輪読を予定している。また、Aタームでは、チベット語仏教文献の講読を行う。

以上のほかに、非常勤講師の先生方により、サンスクリット語、チベット語、漢語にもとづく多彩な講義を開講している。2016年度は馬場紀寿准教授（東洋文化研究所）が「上座仏教文献講読」（大学院と共通）、西本照真講師が「中国仏教・菩提心思想の研究」（大学院と共通）、種村隆元講師が「インド密教思想史研究」、高橋晃一講師が「初期瑜伽行派テキスト研究」（大学院と共通）、福田洋一講師が「チベット仏教文献講読(1)」（大学院と

共通)を担当した。

なお、インド語インド文学専修課程は本専修課程と関係が深く、梶原三恵子准教授(インド語インド文学専修課程)が担当するサンスクリット語文法には、本専修課程の学生のほとんどが参加する。サンスクリット文献講読やパーリ語、タミル語などの文法・講読も各人の関心に応じて聴講してほしい。その単位は本専修課程の特殊講義の単位にあてることができる。また、「外国語」として開講されている「チベット語(1):口語文法」「チベット語(2):文語文法」および「ヒンディー語(1)(2)」も、大乘仏教やインド哲学の研究を深める上でぜひ聴講してほしい。

本専修課程の必修単位は40単位で、インド哲学概論・インド哲学史概説・仏教概論・比較仏教論から8単位、特殊講義12単位、演習8単位、及び卒業論文または特別演習12単位である。その他、選択が36単位で、計76単位が卒業のために必要な単位である。(ただし、2015年度以前の進学者は旧カリキュラムのままで84単位)単位取得に当って、例えば、教養課程でサンスクリット語文法を終えた学生は、改めてその授業を取らず、サンスクリット語を用いた演習によって代用できるなど、意欲ある学生のためにさまざまな配慮がなされている。しかし本専修課程の必修単位40をクリアーしつつも、文学部で開講されている多彩な科目を、各人の興味・関心を生かしつつ、積極的に履修して幅広い教養を身につけることも勿論、歓迎される場所である。

本専修課程では、卒業に当って、卒業論文ではなく特別演習にチャレンジする学生が概して多い。特別演習は、あらかじめ指定されたサンスクリット文献(『アビダルマ・コーシャ・パーシュヤ』『バガヴァッド・ギーター』『ウパデーシャ・サーハスリー』など)や漢文文献(『大乘起信論』『八宗綱要』など)、あるいはインド思想(史)・仏教思想(史)に関わる重要な文献・研究書のうち、3種を選んで読解(自習が基本)し、学年末に試験を受け、あるいはレポートを提出して、その成果が判定されるというもの(各4単位)。大学院に進学する学生の場合、特別演習で原典解読の基礎力をしっかりと身につけておき、進学後、修士論文に全力投球するというのが、多く見られるパターンである。とはいえ、もちろん2年間の勉強の締めくくりとして卒業論文に挑戦するのも大いに結構なことである。

本専修課程は、教養学部から進学する学生のほかに、他専修課程、他学部、あるいは他大学を卒業してから学士入学する学生も含まれ、ヴァラエティーに富んでいる。

卒業後は大学院に進学する学生が多いが、教職や一般企業に就職する学生もいる。最近ではマスコミ、県庁、コンサルタント会社、出版社、メーカー等に就職する学生も出ている。大学院はインド語インド文学専修課程と共同で、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野を組織している。そこには優秀な先輩たちが多くいて、よいアドバイスを与えてくれるであろう。また、大学院には、外国からの留学生も多く、文学部の中でも最も国際色が豊かな研究室の一つである。

大学院生に比して学部生の数は 10 名程度と比較的小人数ではあるが、学生同士、あるいは教員と学生の関係は緊密である。毎年春には、著名寺院の見学などを含む研修旅行を行ない、また、年に数回の研究例会では、先輩たちの意欲に満ちた研究発表を聞くこともできる。さらにはゼミ合宿を行っている教員もいる。

あらゆる面で昏迷の深い現代だからこそ、もう一度、人間精神の根本に立ち返り、インド思想や仏教の哲人たちの奥深いことばに静かに耳を傾けながら、現代に生きる意味をともに考え、語りあおうではないか。